

脊中は腫れ上つてゐる、紫暗色の打撲傷が腕にも足にも脇腹にもある。

「俺がよし精神病者であつても、何の爲に擲るのか」

壁一重隔てた道場で、竹刀の音や氣合を、態とやかましくさせやがる。

「君は今度こそ亂暴したら、狂人病院へ入れるぞ好いか」

隣りの留置場に二人の男が這入つてゐる。

巡査が前に立つて問答をする。

俺に間接に聞かす爲にだ。

「こつちも悪る氣があつてした事ではなし、あんたの方も知らないでなされた事ですから、昂奮しない様にあきらめはつけますが」とか長たらしく留置場の中の男がしゃべる。

要するに俺に靜かにしとれと言ふのだ。

俺は騷擾罪に問はれても、精神病者の免状の下附を此の際申請したりすべきではないと思つた。

「何者だ、俺の身柄を引きとりに來たのか。

署長！